

世紀初頭とされている。分析の結果、銅を主体として亜鉛、鉛が検出された。錫は認められない。博多の資料は板状の部分に精緻な文様が刻まれるなど材質も含め平原の資料とは相違点も多いが、参考例として挙げておきたい。（比佐・松園）

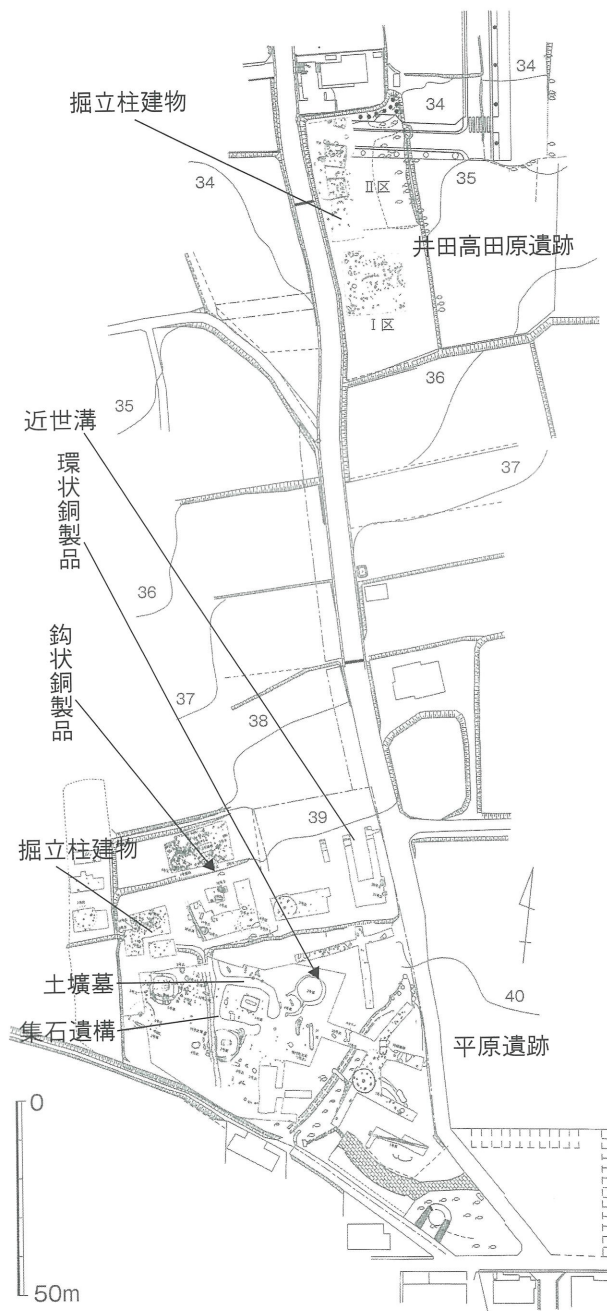


図3 平原遺跡周辺における中近世遺構・遺物の分布

【参考文献】

4. 常松幹雄1993『博多遺跡群29－博多遺跡群第53・67次調査報告』福岡市教育委員会
5. 比佐陽一郎・松園菜穂2018「博多における中世後期の非鉄金属生産」『博多・山口・大分三都市研究会第8回研究集会報告資料集』博多研究会
6. 福岡市埋蔵文化財センター1993『福岡市埋蔵文化財センター年報12 平成4年度』

4. おわりに

今回の蛍光X線分析によって、双方の銅製品がいずれも真鍮製である可能性が高まり、弥生～古墳期の墳墓との関係については極めて薄いことを確認することができた。

とりわけ、環状銅製品は煙管の火皿の一部である可能性が指摘された。雁首との溶接部付近で分離したものであろうか。わが国における真鍮製品の出現時期を考慮すれば、中近世の資料となる。

また、一般的に喫煙文化がわが国に伝来したのは16世紀とされ、全国的な展開をみせるのは江戸時代以降と考えられ、煙管もこれとともに普及したと推定される。

平原遺跡の過去の調査結果を顧みれば、各所で中近世の遺構、遺物が確認されている。

1号墓の周溝から龍泉窯系青磁を副葬した土壌墓が出土しており、井田高田原遺跡では三方に板垣を配した掘立柱建物が確認され、これらは鎌倉期の遺構、遺物である。

また、1号墓の周溝内の集石群や8番地の近世溝では近世陶磁器も出土している。

煙管については、わが国における喫煙文化の開始期を考慮すれば戦国末期以後の産物である可能性が高いと考えられる。

なお、鉤状銅製品は比較対象となる資料が少なく、時期やその用途についての検討は、今後の類例の増加に期待したい。（岡部）

【参考文献】

1. 鈴木達也1999『喫煙伝来史の研究』思文閣出版
2. 岡部裕俊編2017『新訂版平原遺跡』糸島市教育委員会